

マーティン・マクドナ『イニシュモアの中尉』論

河野賢司

筆者はかつて『紀要』16号(2000年8月)の拙論「現代アイルランド劇作家研究(2): マーティン・マクドナ」において彼の4作品の紹介に努めたが、その翌年には待望の第5作『イニシュモアの中尉¹⁾』が英国で初演され、2002年度オリヴィエ賞ベスト・コメディ賞を受けたこの作品は、今夏には日本でも翻訳上演されるなど好評である。上述した拙論の補遺を編む意図をこめて、この新作を追加して紹介する次第である。

なお、次の第6作とされる『イニシアアの泣き妖精たち』(*The Banshees of Inisheer*)はいまのところ未発表と思われるが、『枕男』(*The Pillowman*)なる奇妙な標題のマクドナの著作がまもなく(11月20日)近刊との案内予告がある。第6作が奇妙に改題されて発表されるのか、これまでとまったく別系統の作品なのか、いまから大いに期待される。

さて、『イニシュモアの中尉』(*The Lieutenant of Inishmore*)は2001年4月11日、英国のストラットフォード・アポン・エイヴォン(Stratford-upon-Avon)のThe Other Placeで、Wilson Milam演出のRSCによって初演された。The Other Placeは、実験スタジオを備えた、RSCの最小規模の劇場である。まず、この作品の粗筋を以下に記す。

(I) 『イニシュモアの中尉』の梗概

舞台は1993年、ゴールウェイ州沖合にあるアラン諸島のなかで最大のイニシュモア島。40代半ばのダニー(Donny Osbourne)の家で、近所に住む17歳の小太りで長髪の少年デイヴィ(Davey Claven)がテーブルに置かれた猫の死骸をダニーとともにじっと見ている。死骸は頭部が半分もぎれて、脳味噌が露になっている。デイヴィの説明では、自転車で通りがかった折に道端に横たわっていた死骸を見つけ、蠅が腐肉にたからぬうちにと善意で飼主のダニーの家まで運んできたのであって、自分が轢き殺したのでは決してない、と言う。自転車(母親愛用のピンク色の籠付き婦人車)の前輪を見せて、どこにも衝突事故の痕跡がないことを示し、頭部が破壊されるような事故は自動車か投石、野良犬の仕業しかありえないし、猫好きでない自分でもこの猫だけ

は気に入っていた、と言いきるのだが、ダニーは取り合わない。困ったことにこの猫は、過激派組織「アイルランド国民解放軍」(INLA)²⁾のテロリストである、彼の一人息子パドリック(Padraig)が5歳のときから15年来、飼っていた猫で、爆弾テロ活動に多忙な期間中、その世話を任されていたのだと打ち明ける。デイヴィはこれを聞いて縮み上がる。というのは、パドリックはスカーフを笑った実の従兄弟に暴行傷害をはたらいて車椅子生活にしたうえに、その車椅子まで盗むほどの不良ぶりを12歳にして発揮してから、すでに7人もの被害者がおり、余りの無軌道に「アイルランド共和国軍」(IRA)でさえ入隊を認めないほど、残虐非道で悪名高い男だからである。自分がはねたと素直に自白すればパドリックには黙っておこう、と提案するダニーに、デイヴィは仕方なく自分の責任だと認める。ダニーはパドリックには、加減が悪くて餌を食べない、とまず一報を入れ、1週間後にさらに容体が悪化したと伝え、また1週間後に安らかに息を引きとったと連絡しよう、と策を練って息子の携帯電話番号を回す。(1場)

北アイルランドの人気のない倉庫。上半身裸で天井から逆さ宙吊りにされ、既に片足の小指と薬指2枚の爪をカミソリで剥がされて血が滴りおち、嗚咽の声をもらす地元の青年ジェームズ・ハンリー(James Hanley)を、パドリックはカミソリ片手に威嚇している。彼に言わせると、親指の爪なら確かに痛かろうし、両足から1枚ずつ剥げば歩行困難だろうが、片足なら松葉杖で歩けるように親切に配慮してある、という。次に乳首を少しばかり削いで自分で食べてもらうが、左右どちらの乳首切除がお望みか、早く決めないと両乳首とも切断する、と迫る。彼が拷問を加える理由は、ジェームズが工業高校生にマリファナを販売して若者を墮落させているからである。マリファナくらい昨今、誰でも吸っているし、ポール・マッカートニーだって合法化³⁾を主張している、とジェームズは弁明するものの、最後の決断を迫られ、「右の乳首!」と叫ぶ。カミソリで乳首がまさに削がれようとする間際に、パドリックの携帯電話が鳴る。電話をかけてきた父親ダニーに、爆破活動が最近うまくいっていないことや、IRAの分派であるINLAからもさらに分離独立して一匹狼的な気概を示したい、などと語った後、飼猫「トーマスちゃん」(Wee Thomas)の加減が悪いと知らされるや、いましがたの拷問場面で見せた冷酷な態度が一転、すぐにイニシュモア島に駆けつける、と号泣して伝え、携帯電話を机にぶつけて破壊した挙句に4発の銃砲を浴びせて、さめざめと泣きじゃくる。吊されたジェームズは、猫の食欲不振は輪癬(ringworm)という病気によるもので、薬局処方錠剤をチーズにくるんで与えれば3日もすると元気になる、と助言し、自分もまた大の猫好きであって気持ちがよく分かる、とアピール、今後は二度と麻薬を子どもには売らない、と約束する。パドリックはロープをカミソ

りで切断し、ジェームズはどすんと床に落ちる。病院までのバス賃を与えてパドリックが倉庫から立ち去ったのを確認してから、ジェームズは彼とその猫に悪態をつく。

(2場)

田舎道で自転車のタイヤに空気を入れているデイヴィめがけて空気銃が乱射され、1発が頬に当たる。デイヴィの1歳下、16歳の妹マイレード(Maired)が銃を抱えて現れ、自転車を蹴りとばして溝に落とす。彼女は白のTシャツに軍人ズボン、サングラス、痩身に短髪の可愛い娘である。マイレードが怒り狂っているのは、デイヴィが自転車で猫を轢き殺したという噂を聞きつけたからであるが、自分は死骸を見つけて運んできただけであり、女々しい奴とからかわれるのが嫌で黙っているけれども猫好きだ、それよりも空気銃で10頭以上もの雌牛の目を狙撃したマイレードの方がいかれている、とデイヴィは非難する。これに対して、雌牛の目を狙撃して市場での商品価値を台無しにすることは食肉貿易に反対する政治行動なのだとマイレードは反論する。島じゅう駆け回って、パドリックの飼猫にそっくりな身代わりの黒猫を探している、とデイヴィが言うと、パドリックは21歳の若さで少尉に就任した〈勇敢なエリンの息子〉であり、猫は目や泣き声はもちろん、性格もそれぞれ違うからすぐばれるに決まっている、なかでも自分の飼猫「ロジャー卿」(Sir Roger)はふつうの猫とは違う、と自慢し、愛国バラッド「死に逝く反逆者」(‘The Dying Rebel’)を口ずさむ。その「ロジャー卿」に漫画本2冊を破られたことのあるデイヴィはヘビ・メタバンド「モーターヘッド」の歌を歌って邪魔する。そこへ30代または40代の北アイルランド人で、眼帯をかけ黒い背広姿のクリスティ(Christy)が通りかかる。デイヴィを見て、今朝自分が目撃した、猫を轢き殺した男か、と尋ねるので、デイヴィは必死に無実だと釈明するが、確かに自分は片目で錯覚だったかもしれないが、〈嘘は罪悪なり〉とイエズス会に教えられて育った自分は、猫めがけて全速で突っ込むデイヴィを確かに見たことを撤回できない、と言い残してクリスティは去っていく。撃たれぬように顔を覆って逃げ出すデイヴィにマイレードが空気銃を乱射。残された自転車を蹴飛ばして空気銃を放ち、猫以上に八つ裂きの目に合わせてやる、と憤る。(3場)

1場と同じダニーの家。ある褐色の猫の体に黒の靴墨を不器用に塗りこんでいるデイヴィをダニーが立って見ている。二人ともポティーンを相当量飲んでいて酩酊している。替え玉になる黒猫を島中5マイル探し回った挙句、やっと見つけた黒猫は、子どもたちの飼猫で可愛そうだから奪い取れなかった、とデイヴィが弁明すると、側にいた母親たちが怖かっただけで、生前、自分のお袋さえ足蹴にしたことのあるわしならばそんな女どもは懲らしめてやれた、半塗り黒猫状態でしかも夜中に体毛をぺろぺろ舐めようものなら万事休す、だと言って、靴墨塗り作業を交替する。この猫には「ロ

ジャー卿」なる名札がついていて、すぐばれてしまうのでそれをはずす。いっそのこと、体毛が褐色に変色し、靴墨臭を発する特殊な病気にかかった作り話をでっちあげようか、とか、靴墨の臭いは妙に食欲をそそり、小さいころ舐めてみたことがある、といった馬鹿話に興じたあと、塗かけのまだら猫を抱き上げ、これじゃ、パドリックに脳味噌をぶっ飛ばされるな、と笑い合う。(4場)

夜中の道端に3人の北アイルランド人が座っている。彼らはパドリックと同じINLAに属する同志のメンバーで、3場で登場した年長のクリスティと、ともに20歳で仲の悪いブレンダン (Brendan) とジョーイ (Joey) で、ジョーイだけが離れている。猫殺しの真犯人は実はこの連中であり、「目的は手段を正当化する」⁴⁾という言葉でクリスティが引き合いに出して、マルクスの言葉だと言うと、ブレンダンは、いかにもロシア人の言いそうな表現だが、マルクスでないことだけは確かだ、と反論する。ジョーイは、なにも猫殺しのためにINLAに入隊した訳でもなく (実際には猫殺しの実行犯はクリスティとブレンダンで彼は手を下していないのだが)、無抵抗な相手を狙い撃つのはちょうど「血の日曜日事件」のイギリス軍のような卑怯な真似であり、名前が妙ちくりんだからという理由でエアリー・ニューズを爆死させたのと同じ墮落だ、と憤る。猫殺しの意図は、パドリックをイニシュモア島の実家におびき寄せることにあり、INLAからさらに分離活動し、麻薬密売人を肅正しようとする彼の存在は、INLAの資金源である麻薬密売人からの〈しのぎ〉、〈みかじめ料〉に頼っているINLAの存立基盤を危うくするものであり、アイルランドの自由解放はなにも学校の生徒や老人や胎児のためばかりでなく、麻薬常用者や窃盗犯やヤクの売人のためでもあるのだ、クロムウェルだって猫を大量に火炙りしたではないか、と (自分では名演説と思いこんでいる) 持説をクリスティは展開する。イエズス会の教えで嘘はつかない、と言って、猫殺しの濡れ衣はデイヴィにうまくなすりつけてあるから大丈夫、とクリスティが笑うと、またしてもブレンダンがそれはイエズス会の言葉ではない、と絡む。結局、明朝10時集合の襲撃計画を確認して3人が立ち去ったあと、このやりとりを盗み聞きしていたマイレードは考え込み、空気銃のコックをはずす。(5場)

夜中の別の道端。口紅に薄化粧のマイレードが愛国バラッド「パトリオット・ゲーム」 ('The Patriot Game') をそっと口ずさんでいる。パドリックが現れて唱和し、作詞者ドミニック・ピーアンや兄のブレンダンが執筆よりも爆弾活動にもっと精を出してくれていたら尊敬が増したのだが、と語る。5年前、11歳だったマイレードはイギリス潜行活動に出かけるパドリックに同行を志願したほど、彼にずっと夢中だが、教会でのダンス・パーティの誘いは軟弱と断られ、冤罪事件「ギルフォードの4人組」を題材にした政治映画 (邦題『父の祈りを』) さえ、無実を主張するのではなく、(やっ

てていなくても) 誇らかに自分たちの犯行だと言えばよい、と非難される始末。雌牛射撃をからかわれたマイレードは、それは昔のことでしかも60ヤード(55m)も離れた地点から狙ったのだ、と弁明する。託かっている伝言を巡って二人は口論となり、互いに銃と空気銃を相手に向けて睨み合うが、パドリックの方が折れる。INLA入隊を志願するマイレードに、美人以外の女性隊員の入隊は認めない方針だ、と容姿をけなし、髪を伸ばして料理や裁縫を学び、誰か他のいい男と結婚する方が身のためだ、と忠告する。マイレードは、〈パドリックの愛猫の病状は峠を越えたが、念のため急いで帰宅した方がよい〉という偽りの伝言を伝える。安心したパドリックはマイレードを抱き寄せてキスし、やがてキスは官能的なものになり、二人は離れる。立ち去るパドリックの後ろ姿を見やりながら、彼女はまた「パトリオット・ゲーム」の一節を口ずさむ。(6場)

早朝5時のダニーの家(4場と同じ)。肘掛け椅子に座って眠たげなダニーは、少し仮眠をとって9時から靴墨塗り作業の最後の仕上げにとりかかるから、寝過ごさずに起こしてくれ、とデイヴィに依頼。自分は子どものころから、時刻を1分と違わずに起床できる、忍者のような特殊能力が備わっているから大丈夫と、デイヴィは安請け合い。彼は死んだ「トーマスちゃん」の墓に立てる木の十字架を拵え、靴墨で「トーマスちゃん」と墓碑も記していた。9時に起こすようにと、ダニーは何度かデイヴィに念を押し、二人は眠りにつく。(7場)

同じくダニーの家で時刻はすでに正午。手が靴墨で真っ黒なまま、二人とも肘掛け椅子でまだ眠りこけている。(テロリストの身ゆえ、秘密の家あるいは野宿で夜を明かしたのだろうか)パドリックが静かにかつ嬉しそうに帰宅して愛猫に呼びかけ、替え玉の黒猫の背中を撫でる。しかしすぐに手が黒いのに気づき、臭いを嗅ぐ。靴墨で汚れた二人の手も確かめ、床に置かれた「トーマスちゃん」の十字架を発見し、事の真相を悟って激怒したときに、デイヴィはようやく眠りから覚め、パドリックの姿を目にして驚愕する。銃口をデイヴィの頭に向け、愛猫の所在を迫る怒声に、父親も目が覚め、怯える。〈体毛変色病〉という例の苦し紛れの口実を持ち出し、これが本当に「トーマスちゃん」だと言ひ張る二人の目の前で、激しく逆上したパドリックは替え玉猫に発砲し、血飛沫と骨が飛び散る。パドリックはデイヴィの顔を血まみれの猫死骸に押しつけたのち、死骸を浴室に放り捨て、さらに例の十字架に父親の顔をぶつけて、自分の猫は死んだのか、と詰問する。観念したダニーがそうだ、と答えるとパドリックは呻き声をあげる。デイヴィが自転車ではねたうえに投石した、とダニーが密告すると、デイヴィは無実を主張、ダニーこそキャット・フードの代わりにコーンフレークを与えていた、と罪をなすりつけ合う。パドリックは戸棚からロープを取り出し、

父親，次にデイヴィを後ろ手に縛り上げる。虚勢を張ってパドリックをなじるデイヴィの頭髪をパドリックは鞘付き獵刀 (bowie knife) で乱暴に切りちぎり，拳銃2丁を取り出し，それぞれを跪いた二人の後頭部に押し当てて最期の懺悔を迫る。懺悔することなどない，とデイヴィは断り，ときたまコーンフレークを餌に与えていたことだけをダニーは詫げる。別の猫をまた飼えばいい，と言うデイヴィをパドリックは拳銃で殴りつけ，いまとなつてはもう生き甲斐がない，と嘆いて，まさに二人を射殺しようとした刹那，玄関ドアにノックの音。応答に出たパドリックの前に現れたのは例の3人組のINLAの同志で，彼は仲間を愛想よく招き入れ，そのまま射殺を続行しようとするが，背後に隠し持った銃を3方向からめいめいがパドリックの頭に押し当て，2丁拳銃をテーブルに置かせる。クリスティはパドリックの反・麻薬活動が組織の財政運営を阻害すること，またかつて彼のせいで片目を失明した恨みを述べ，その場で銃殺しようとする。パドリックは実の親父の面前で自分を射殺すれば，トラウマが父親に残るからやめてくれ，と頼むが，ついさきほど実の息子に殺される寸前だったダニーはまったく相手にしない。遺体処理にも便利だし，同じように道端で死んだ愛猫に祈りの言葉を捧げるためにも家の外で射殺してくれ，と申し出るパドリックの願いをいれて，3人組は彼の手を後ろ手に縛る。形勢が逆転し悪態をつくデイヴィに，「10分したら戻ってくる，なにか起きる予感がする」と言い残してパドリックは戸外へ連れ出される。息子が射殺されるのは悲しいか，とデイヴィに訊かれたダニーは，「そうでもない」と答える。射殺が済めばまたイニシュモア島に平穏が戻り，観光客もやってくる，と縛られた二人が無慈悲にも話し合ううちに，マイレードの発射する空気銃の連発音が響き，それに応戦する3人の銃声と悲鳴が聞こえ，目を狙撃されて苦しむ3人が家に舞い戻ってくる。視力を奪われた3人は銃撃方向をデイヴィとダニーに教えてくれるように頼むが，ダニーは嘘の指示を与え，そのスキにパドリックとマイレードはドアから侵入，さきほど捨てさせられた自分の2丁拳銃をつかみ，まずブレンダンを，背後から押し当てた2丁拳銃で射殺する(銃撃を続けている他の二人はこの銃声に気付かない)。パドリックは同様の方法でジョーイも射殺し，銃弾が切れたときに他の銃声が止んでいるのに一瞬気づいて銃を捨て命乞いを始めるクリスティに，パドリックは容赦なく胸部を狙って2丁拳銃を発射し，クリスティは床に倒れるが，まだ息はかすかに残っている。パドリックとマイレードはキスを交わし，縛られたままの二人に向かって，パドリックは父親処刑の続行を，マイレードは彼とテロ活動を続けるための射撃実地訓練の目的で兄デイヴィの射殺の意思を示し，3つ数えていっしょに発射しようとする。まさにカウント3が発せられた瞬間に，いまわの際のクリスティが最後の告解として，パドリックの愛猫殺害を自供する。パドリックは瀕死のクリステ

ィを隣部屋へと引き摺り、マイレードに持ってこさせたナイフやカミソリなどでさらに拷問を加える。(8場)

同じダニー家のその夜。ダニーとデイヴィは血まみれになって、ブレンダンとジョーイの遺体をバラバラに切り刻んでいる。「トーマスちゃん」の十字架を喉に突き刺さしたクリスティの死体の上にパドリックは座って、墓から掘り出したらしい愛猫の、首のない亡骸を撫ぜながら茫然としている。ダニーとデイヴィは静かな声で、IRAの方がINLAよりも活動範囲も広くて権威がある、とか、マイレードは射撃の名手だが、至近距離から2丁拳銃を使うパドリックは格好をつけすぎだ、などと雑談を交わす。リュックと空気銃を持ち、可愛いドレス姿に変身したマイレードが登場。無駄話をやめて死体解体作業に専念し、(身元確認を困難にするために)とくに歯を念入りに粉碎するように命じる。彼女はパドリックから少尉に任命され、母親との別れの挨拶も済ませてきたと言う。猫の死に悄然とするパドリックを彼女は鼓舞し、二人はキスを交わす。パドリックはINLAを脱退して二人だけで別組織の分派(その名も「トーマスちゃんの軍隊」)を結成し、手始めの活動として、2場で拷問が中途半端に終わったジェイムズの肅正を提案する。20名の狙撃対象リストを「ポップス・ベスト20」のように作成し、訳もなく猫殺しをする人間を筆頭にあげるべきだ、と言うマイレードの言葉に、靴墨だらけで不潔な替え玉猫を殺したことをパドリックが思い出して伝えると、不潔な猫なら構わない、と彼女は許す。自分の愛猫「ロジャー卿」の姿が最近見えないのを心配するが、きっと盛りがついてうろついているのだろう、と想像し、パドリックは自分の愛猫の亡骸を植木箱(window box)に収め、今後は肌身離さず持ち歩くと主張する。死体解体作業の二人に声をかけ、指紋を焼払う必要やもう一体、クリスティの解体が未着手であり、生意気な態度のデイヴィを殺さずにいるのは将来、義理の弟になるからだ、と、マイレードとの結婚を仄めかす。妹の結婚で〈狂った狙撃兵〉パドリックや〈母親虐待男〉ダニーと親戚になるのは嫌だ、とデイヴィが言えば、こっちこそ、〈ゲイのヒッピー〉娘マイレードや〈猫磨き男〉デイヴィとの縁組などまっぴらだ、とやり返すダニー。この〈猫磨き〉の言葉に反応したデイヴィは、死体の断片を掻き分けて、無造作に捨てていた「ロジャー卿」の首輪と名札を探しだし、マイレードの目を盗んで窓から外に捨て、証拠湮滅をはかる。パドリックはマイレードに、血のついたドレスを着替えるか、血痕を洗い流すように指示し、マイレードは浴室へ向かう。だが、「俺が撃ち殺した汚い猫の死体が浴室にあるから気をつけろよ」と言うパドリックの声にデイヴィは茫然自失する。やがてマイレードが浴室から「ロジャー卿」の亡骸を抱えて静かに現れ、兄デイヴィに手渡して彼の髪を撫でる。「死に逝く反逆者」の歌を口ずさむマイレードにパドリックは唱和し、ふたたびキスを交わすが、

彼女はやおら、背後の2丁拳銃を両手でつかみ、気づかれぬようパドリックの頭部側面に向ける。歌詞を忘れたパドリックに「あたしの猫は不潔なところなどなかったわ」と呟き、「違う歌詞だったはずだが」と誤解して答える彼に「そうよ」とだけ言って、いきなりなんの予告もなく引き金を引く。パドリックは自分の猫の亡骸を抱えたまま、即死する。デイヴィから「ロジャー卿」を受け取り、新たに増えた死体解体作業の続行を命じ、人間を狙撃するのもうんざり、何故「ロジャー卿」が半分黒く塗られて死んだのか、明日は調査するわ、と言い残して、彼女は自分の家へ帰っていく。彼女がいなくなったあとしばらくして、一匹の黒猫が壁穴から入ってきて棚の上を歩き回る。実は、この猫こそが正真正銘の「トーマスちゃん」であり、パドリックの腕に抱かれた猫の亡骸は、よく似たよその黒猫だったことに二人は気づいて愕然とする。4人の死体に2匹の猫の死体という惨劇を招いた責任はそもそもこの猫にあるとして、二人は「トーマスちゃん」殺害を決意し、パドリックの口の中に押し込まれていた2丁拳銃を抜き出して、3つ数えて二人で同時に猫の頭部を吹っ飛ばそうとする。しかし、カウント3になっても、ともに引き金を引く勇気が出ず、ダニーは餌のコーンフレイクを与えて、猫を撫でる。舞台にあげた本物の猫が食べれば「言った通り、コーンフレイクが好物だろうが、デイヴィ」というダニーの台詞、もし食べなければ⁹⁾「コーンフレイクは全然好きじゃないよ、ダニー」というデイヴィの台詞で暗転して、幕となる。(9場)

(II) マクドナ演劇の特色のまとめ

1. ストーリー・テリングの妙味

マクドナ演劇でいつも感服させられるのは、物語の展開の妙である。読者や観客が予測する筋書きは絶えず裏をかかれ、結末には思いもかけない〈どんでん返し〉が必ず用意されている。『イニシュモアの中尉』においても、冒頭でパドリックの飼猫の死は既成事実として大前提に置かれて、猫殺しの真犯人はいったい誰なのかに関心が移行していくなかで、最後に示される猫の生存は、人を食ったような〈落ち〉である。すでに発表された他の4作品にしても、結末が予測できる読者はほとんどいないのではないかと思われるほど、巧みな伏線を張り巡らせて一気に種明かしに収斂させる巧妙な技法は、ほかの劇作家の追従を許さないマクドナの持ち味である。

アラン諸島3部作はまだ完結していないが、ダニー父子の姓〈オズボーン〉とデイヴィ、マイレード兄妹の姓〈クレイヴン〉は、前作『イニシュマーンの跛』に登場する、ケイト、アイリーン姉妹の姓、ビリー少年の姓とそれぞれ同一であることは留意

すべきだろう。『イニシュマーンの跛』からほぼ60年後の、別の島イニシュモアでの出来事であるが、3部作の登場人物は目に見えない血縁でつながっていると考えるべきだろう。

2. 家族に向けられた憎悪と暴力

9場でデイヴィが要約するように、この作品には「4人の死人と2匹の死んだ猫」(68)が描かれている。未遂に終わるものの、8場でパドリックは父親ダニーに2度も銃口を向け、マイレードも兄デイヴィを射殺しかけている。マイレードによるパドリック殺害は家族になる予定の婚約者殺しである。すでに『リーナン村のミス・コン女王』のモリーンによる母親殺し、『コネマラの頭蓋骨』のミックによる妻殺し疑惑、『孤独な西部』のコウルマンによる父親殺しと、兄弟相互の兄殺し未遂・弟殺し未遂、『イニシュマーンの跛』のビリーの両親による嬰兒殺し未遂と、ジョンによる安楽死補助的母親殺し、あるいは複数の作品での犬猫、ハムスター、がちょうなどの動物殺しや、この作品で中心テーマとなる猫殺しや雌牛虐待などなど、マクドナ作品にはありとあらゆる親族殺人や動物虐待が網羅され、壮絶で陰惨な殺人戯曲集の観を呈している。父や兄に冷然と銃を向ける行動だけでも空恐ろしいものを感じさせるが、『イニシュモアの中尉』の血なまぐさは、逆さ宙吊りにして爪を剥ぎ、乳首まで切断しようとする2場の拷問場面もさることながら、バラバラ死体解体作業が繰り広げられる9場で頂点に達する。『コネマラの頭蓋骨』において過去の遺骨の粉碎場面はあったものの、ここではつい半日前までは生きていたはずの人間の腕や頭、臓物などの腐分けに類する作業や背骨の切断作業が舞台上で展開され、いやがうえでも観客の目に晒される。いくら紛い物の舞台道具とはいえ、少しでも感情移入すれば吐き気を催さずにはおかない、ホラー映画並の醜悪な光景である。

ただ、この非日常的場面で交わされるやりとりは残虐さに精神が麻痺しきったせいもあってか、一面では極めてオートンの乾いた感覚を呼び起こす。例えば、7場のデイヴィの台詞「せっかく死んだ猫を埋めてやったというのに、掘り返しやがって。しかもお礼の言葉一つないんだから」(56)や、死体解体作業がなかなか進捗しないことに触れて、「そりゃ、奴らは訓練を積んでないからな」(58)というパドリックの答えや、「なんで俺らがこの仕事をやらなくちゃいけないのか分からないや。俺たちが殺したわけじゃない。もし俺たちが殺したんだったら、『ごもつとも』というところだけど、そうじゃないんだから」(61)と訴えるデイヴィの不満も、健全な日常感覚の倫理観を刺激され、居心地の悪さ、違和感や反発を掻き立てずにはおかない観客が多いだろうけれど、死体の断片があちこちに横たわる異常な文脈のなかで、ひとたび善悪の

観念が麻痺してしまえば、妙に納得させられてしまうかもしれない。〈他人の猫を勝手に埋葬して隠しておき、替え玉猫で騙そうとする試みは許されるのか〉〈そもそも人間は死体解体の訓練を1度でも経験すべきなのか〉〈自分が犯した殺人であれば、人は平気で死体をバラバラに切断できるものなのか〉——こうした問いかけは、麻痺した神経には感知されないまま、消えていくのである。

3. 倒錯した価値観

しかも殺人を実行するパドリックとマイレードの二人が、他の人間の誰にたいしてよりも強い情愛を自分が飼っている猫に抱き、猫こそが自分の人生でもっとも大事な存在と信じて疑わないことは重要である。『孤独な西部』のヴァレンが自分の生命よりも新製品のガス・コンロや聖母像コレクションへの物神崇拝を示したように、パドリックとマイレードは「トーマスちゃん」と「ロジャー卿」を誰にもまして心の友として溺愛していた。パドリックとの恋愛に心を奪われたかに見えたマイレードだが、「ロジャー卿」を殺したパドリックを許す気持ちは微塵も生まれず、釈明の機会すらまったく与えぬまま、一片の躊躇も見せずに射殺で報復していることは特筆に値する。猫への愛が人間への愛をはるかに凌駕している、こうした倒錯した価値観や心理は、通常の間感からはおよそ受入れがたいし、理屈ではいくらでも非難できるだろう。しかし、自分にとってもっともかけがえのない存在が、肉親や配偶者、恋人などの人間であらねばならない必然性は、もしかすると世間の常識で考えられるほど高くはないのかもしれない。生命を宿す同じ生き物として、人間と他の動物⁹⁾を対等な関係に置くことは、歪んだ生命観とは呼べないのかもしれない。一見、倒錯したかに見える価値観を提示して、マクドナは人間至上主義の傲慢な価値観の再考を迫っているとも言える。テキストの献辞「プシー（ネコちゃん）へ（1981-1995）」から想像されるように、マクドナ自身に15年来の飼猫がいて作品のモデルであったとすれば、劇作家の心は、かなりパドリックに代弁されている可能性がある。

4. 政治的言及による風刺

政治に関与することの比較的少なかったマクドナだが、本作品ではテロリストを主人公に据えたせいもあって、政治的言及が顕著である。そしてそのほとんどがテロリズムへの痛烈な風刺と諧謔に満ちている。アラン島出身のINLAテロリストが実在するか否かは大いに疑問であり、離島とテロリズムという組み合わせそのものが、アラン3部作の前作『イニシュマーンの跛』のリリースから大きく踏み出した構想である。

パドリックが麻薬密売人を拷問する際に漏らす言葉——「もしプロテスタントにだけ限って商売をしているのなら、それもまあ仕方ないというところだが、お前はそうじゃなくて、誰でも歓迎じゃないか」「街頭に出て警官めがけて瓶を投げつけるべきときに、若者たちを、ヤク漬の、なまくらなボンヤリ頭にさせやがって」(12)——には、敵陣営の連中（プロテスタント）なら麻薬中毒で墮落してもいっこうに意に介さないという偏った党派主義と、テロによる破壊活動人員確保のためだけの麻薬撲滅運動という不純な動機が露である。パドリックが爆弾を仕掛けた場所が、標的とすべき英軍兵舎ではなく、街のファースト・フード店なのも単に警戒が厳しくないという安易な理由にすぎないし、「IRAの連中のいいところは、毛嫌いしてもこれは兜をぬがなきゃならんが、ちゃんとした爆弾を作る術を心得ている点だ」(14)は、IRAの政治的思想的信条の正当性の議論を無視して、爆弾製造技術だけを褒めそやす、あからさまな皮肉である。

5場でジョーイが、妙ちくりんな名前の奴だから爆死させたとするエアリー・ニーヴ(29)は、ケン・ロウチ監督映画『隠れた議題』のなかではイニシャルだけ合わせた仮名で登場する大物政治家であり、INLAなりに標的とする価値のある重要人物であるにも関わらず、〈名前が妙ちくりんだから〉という暗殺理由を挙げているのは、手酷い風刺である。パドリックの猫「トーマスちゃん」の由来⁷⁾は不明だが、マイレードの猫の名前「ロジャー卿」はもちろん、復活祭蜂起に際してドイツ軍の助力を得ようとして失敗し、処刑されたケイスマント(Sir Roger Casement, 1864-1916)にちなむ命名である。いかに彼女が共和主義者とはいえ、猫にまで悲劇の英雄の名をつけるのは滑稽な印象を与えるだろう。

また、7場において、IRAはベルギーにも出かけることがあるが「INLAは絶対にベルギーには行きっこない」し、「INLAがオーストラリア人を射殺するってことはないよな」(55)と、死体を切り刻みながら語るデイヴィの口調は、あまりにも当事者意識の欠落した、国際問題評論家風の発言であるし、テロ活動を物見遊山の海外旅行と同一視している。

アイルランドが解放された暁には結婚しようとするパドリックとマイレードに、「どえらく長い婚約期間になるぞ！」(61)とか、「百年たっても、やっぱり待ちぼうけさ」(62)と皮肉るダニーとデイヴィの脳裏には、北アイルランド問題が近々解決される期待や見通しはまったく存在しないのだろう。

5. 官能性の稀薄さ

ギャング映画顔負けの暴力と緊迫したサスペンスに溢れるマクドナ演劇だが、官能

的な性描写に関しては極めて控え目であることは注目すべきだろう。俗に言う「エロ・グロ・ナンセンス」の〈エロ〉だけはマクドナにはないのである。この作品ではパドリックとマイレードの抱擁やキスの場面は幾度か出てくるものの、一線を越えることはない。『リーナン村のミス・コン女王』3場のモリーンとパトウの激しい抱擁場面と下着姿のモリーンの4場を除けば、『孤独な西部』のガーリーンがウェルシュ神父に抱く感情は純愛そのものだし、『イニシュマーンの跛』のビリーとヘレンはまだデートもしていないし、『コネマラの頭蓋骨』にはおよそ官能のかけらもない。つまり、マクドナの登場人物は暴力に走ることは多いが、その暴力は性的衝動（リビドー）を根源に持たず、非粘着的である点に特徴がある。この点は大胆で奔放な性描写をちりばめたマクファーソンとの決定的な差異かと思われる。

(III) 邦訳上演の印象についての雑感

本作品は『ウィー・トーマス』という邦題、長塚圭史の演出で、2003年夏に渋谷、水戸、大阪で上演された（順に20,1,2公演の全23公演）。筆者は9月2日の大阪公演（シアター・ドラマシティ）を観劇する機会を得たので、簡単に報告したい。

テキストを最初に読んだときに感じたのは、慄然とする恐怖の淵とそこから湧きあがる笑いの振幅の激しさだった。この芝居は文句なしに面白く書かれている。しかしその面白さは恐怖と裏返しになった面白さであり、暗闇の恐怖が十二分に伝わらないと増幅されない面白さである。その点では、この芝居のなかで恐怖の雰囲気を決定的にすべき、2場の逆さ宙吊り拷問場面に、鬼気迫るものがなかった。ひとつにはパドリック（北村有起哉）に薄気味悪さが無いのである。なにをしでかすか分からないテロリストの底知れぬ不気味さが背筋がぞっと寒くなるほど伝わらない限り、愛猫のことを語る時彼が見せる軟弱さとの、拍子抜けする落差が生かされない。筆者にはパドリック役の人物が、世間にはざらにいる、ありきたりな与太者としか映らず、爆弾テロリストとは感じられなかった。（もちろん、本物のテロリストを筆者は現実に見たことはないけれど、テキストが読者に想像を迫る理想のテロリスト像には達しなかったという意味である。）縄をナイフで切って床に乱暴に落下させることもなかったし、投げつけた携帯電話が倉庫の壁にぶつかったらしい、不自然な響きの効果音（テキストには無論、ない）よりも、テキスト通りに、携帯電話に銃を4発発砲する方がこの男の異常な苛立ち・キレやすさを浮き彫りにしたはず。

同じことはINLA 3人組についても言える。彼らはたしかにお調子者、道化師の側面を持つだろうが、コメディアンではない。ブレンダン（加藤 啓）の口癖「…じゃ、ね

えっしょ」は語尾の滑稽さで繰り返し客席の笑いをとっていたが——これはもしかして、北アイルランド出身者というので北海道方言をあてたものか？（翻訳は目黒 条）——3人揃った妙な敬礼のしぐさ同様に、彼らから邪悪な威圧感をきれいさっぱり消し去ってしまった。

父親ダニー役の俳優（板尾創路）は実年齢40歳。これはテキストの指定（40代半ば）をほぼ満たしているが、本来21歳のパドリックを29歳の役者が演じたこともあって、パドリックの父親とは思えぬままだった。もう少し年配、たとえば50代の役者を起用していれば世代の違いが明確になっただろうと思う。同様にクリスティ（三宅弘城）は他の2人とは一回り年長の風格が要求される役どころであり、3人組が同じ世代に見えては困る。マイレード役の女優さん（佐藤康恵）からは、筆者のテキスト・イメージでは、もっと声に力のある、ハスキーで男っぽい台詞が聞きたかった。デイヴィ（中山 祐一朗）の演技は味わいがあったが、もっともっとトボケてもよかったかも知れない。デイヴィとダニーの4場の酩酊場面で、酒の匂いがちっとも演技や台詞に漂っていなかったのは残念。殺し屋参上を直前に控えても、正体なく酔っ払ってしまう場面はアイルランド演劇の見せ場だと筆者は思うからである。

テキストは*The Lieutenant of Inishmore* (London: Methuen, 2001) を使用し、拙訳による引用はこのテキストの頁数を引用末尾に付した。

注

- 1) 標題を「中尉」とするか「少尉」とするか、微妙なところ。もちろん、語義的にはlieutenantの訳語は「中尉」であり、「少尉」にはsecond lieutenantが相当する。しかしながら、この標題がパドリックを指していることに間違いはなく、3場で「パドリックは21歳にして少尉じゃない？」「そりゃ、たしかに少尉だ」というマイレードとデイヴィのやりとり(20)を経て、最後の9場で「私は少尉よ。たったいまパドリックに任命されたの。彼は自分を中尉 (full-blown lieutenantship) に任命したわ」(57) というマイレードの台詞に至るまで、この劇においてパドリックは少尉として過ごす時間のほうが圧倒的に長いことは自明である。しかも、アラン諸島3部作の標題がいずれも「島の名称と1つの名詞」で簡潔かつ整然と構成されていることを思えば、8場までのパドリックの実際の階級second lieutenantを、語調の関係からlieutenant 1語にあえて省略して、マクドナが標題に据えたのだという解釈も決して強引ではない。(たとえば、厳密には助教授が主人公でも、『淡路島の大学教授』などとタイトルをつけても許容されるように。)むしろ、もしこの昇進後の自称「中尉」を標題として重視するならば、婚約者マイレードを唯一の部下の少尉として任命した矢先に、その腹心の少尉から殺害される運命を迎える、きわめて短命な「中尉」という皮肉や悲劇性を読み取らねばならなくなる。結論としては、「少尉」という訳が作品の実態には即しているが、「中尉」に形式上、昇任したことも否定できない事実なので、ここではとりあえず「中尉」をあててみた。

- 2) INLAは、1972年のOIRA（「正統派IRA」）による停戦に抗議するOIRAの一部メンバーが、1975年の停戦時にPIRA（「暫定派IRA」）から人員を補充し、IRSPの軍事部門として1975年に創設した非合法準軍事組織である。
- 3) 2001年に英国で実施された世論調査によれば、酒類と同様の許認可制を敷いてマリファナ販売を容認する声は65%に達し、鎮痛剤としてのマリファナ処方では91%の人々が支持している。これは、少量であれば所持しても逮捕を免れるCランク薬物（“Class C” drug）にマリファナを格下げする意向をブランクett内務大臣（Home Secretary David Blunkett）が発表したのを受けて実施された電話調査で、成人603人が調査対象だった。[*The Japan Times*, October 30, 2001, p.8.] また、酒やタバコよりも危険が少ないとして、すでに9千万近いアメリカ国民が不法薬物を使用している現実を踏まえて、マリファナなどの嗜好薬物の合法化を主張する書も出回っている。[たとえば、Douglas Husak, *Legalize This!: The Case for Decriminalizing Drugs* (Verso, 2002)]
- 4) 「目的のためには手段を選ばず」の方が日本語として馴染みがあるかもしれないが、このEnd justifies the means.（「目的は手段を正当化する」）という表現は、17世紀のドイツの神学者Hermann Busenbaum（1600-68）の著書*Medulla Theologiae Moralis*（1650）のなかの一節“Cum finis est licitus, etiam media sunt licita.”——これは“When the end is allowed, the means also are allowed.”（目的が許されるのなら、手段もまた許される）の意味——を典拠としているという。[Angela Partington (ed.), *The Oxford Dictionary of Quotations* (Revised 4th Edition) (Oxford/New York: Oxford University Press, 1996), p.165.] 一方、endは「結果」の意味にも解釈できるとして、さらにローマ時代にまで溯り、詩人オウィディウス（Ovid, 43 B.C.-A.D.17）の恋愛詩集『女主人公たち』（*Heroides*）にある*Exitus acta probat.*（結果は行為を是認する）をこの諺の起源に求める研究書もある。ただし、この〈結果オーライ〉の解釈は「終わり良ければすべてよし」の発想に類似してしまうであろう。[戸田 豊『現代英語ことわざ辞典』（リーベル出版、2003年）、p.461.]
- 5) 筆者が観劇した晩は、猫はコーン・フレイクに口をつけなかったので後者の台詞が使われた。高級「キャット・フード」の商品名「シーバ」（Sheba）は日本でも販売されているせいか、観客の反応が非常に良かった。
- 6) マクドナと同年代で、ダブリン在住の若手劇作家マーク・オロウ（Mark O’Rowe, 1970-）の『両の尻から』（*From Both Hips*, 1999）では、ある動物行動学者の学説——犬には情愛などの感情はなく、ただ本能に従って行動するのみであり、いくら飼い主が犬を愛しても一方的な関係に終わる——に偏執狂気味に落胆するリズという女性が描かれている。
- 7) 仮説として、Thomas McDonagh（1878-1916）にちなむのでは、と筆者は推測する。復活祭蜂起に参加し、銃殺刑執行に際して「王子のように、立派に死んだ」と評される彼は、テロリストのパドリックの賞賛と盲信に値する人物であろうし、劇作家と同じマクドナ姓であることも示唆に富む。